

令和7年度 第2回男女共同参画審議会 議事要旨

- 1 日 時 令和7年9月3日（水） 15：45～17：45
- 2 場 所 ひょうご女性交流館 501会議室
- 3 出席委員 井野瀬委員<会長>、植村委員、小倉委員、柏木委員、日下委員、佐伯委員、櫻井委員、高橋（主）委員、高橋（実）委員、瀧井委員、田中委員、谷勝委員、長尾委員、中村委員（五十音順）
- 4 県出席者 田中県民生活部長、喜多県民生活部次長、永園男女共同参画センター所長、水川男女青少年課長、奥本男女青少年課副課長、永野男女共同参画班長、ほか関係課職員

5 概 要

委員14名の出席により審議会成立。

・審議会の運営について

本審議会について、原則公開することについて決定した。

・議事

(1) 男女共同参画審議会運営規程の改定について

資料1について事務局から説明し、改定について了承された。

(2) ひょうご男女いきいきプラン2030（仮称）の骨子案について

資料2・3について、事務局から説明し、骨子案について出席委員から意見を聴取した。委員の意見等については次のとおり。

6 主な意見

【資料2について】

- ・ 中山間地域と神戸・阪神間では状況が異なるため、若者の転出超過に関する統計は県全体の数字だけではなく、地域別のデータも示してほしい。
- ・ 民法改正に関する記述について、共同親権の施行はまだされておらず、令和8年5月までに施行となっている。
- ・ 女性に対する暴力の統計について、表面上の数字だけでは実態を把握できない。性暴力や性被害には「暗数」が多く、顕在化していないケースが多数存在することから、統計の裏にある実態を県民に伝える表現を加えていただきたい。
- ・ 生きづらさを抱える男性への視点が盛り込まれていることはありがたい。専業主夫として家庭を支えてきた男性が、稼ぎが十分でないために、子どもが成長した後に「もう必要ない」と言われるなど、経済的な役割を果たせないことで生きづらい状況に陥るケースがあり、これからの課題として考えていかなければいけない。
- ・ 国もそうではあるが、16ページで家事・育児と介護を一括りにして扱う傾向があることに疑問がある。それぞれの性質が異なるため、統計や施策上も分けて考えるべきで、現状では解像度が逆に低くなってしまっているのではないか。

- （事務局）家事関連時間は、国の社会生活基本調査と同様に「家事」「育児」「介護・看護」「買い物」の合計としている。解像度という点では、男性の家事関連時間 94 分のうち介護・看護は 0 分、女性の 436 分のうち介護・看護は 1 分と非常に少なく、懸念されるような影響はほとんどないと考えている。
- 家事育児と介護では課題の根本が異なるため、同じ枠で扱うと原因の特定や解決策が見えづらくなる懸念がある。意識の違いも含めて、介護は別の視点で整理すべきではないかということである。

【数値目標設定について】

- 資料 2 の 8 ページ、「次世代への継承」の数値目標に、出会い支援事業の成婚数を設定しているが、次のプランでは数値目標に設定することには反対である。結婚が必ずしも出産に結びつくわけではなく、結婚しない家庭からも子どもは生まれているため、全県民に対するプランとしては、そういう視点で数値目標も考えてほしい。
- 男性の育休取得率が上昇しており、「85%（2 週間取得）」という目標も良いとは思いますが、例えば「1 ヶ月取得が 100%」など、より大胆な目標設定をするのはどうか。育休を通じて男性の生き方が変わる事例も見てきたので、そこから見えてくるものもあると考える。－

【骨子案全体について】

- 推進項目 5 にある「五国」という表現については、わかりにくい部分やかえって固定概念を助長する恐れもあり、地域の多様性を表す表現としては適切ではない。
- 「解消しましょう」などといった表現は一見、綺麗な言葉だが、具体的な実施方法が伴わなければ実効性に欠ける。アンコンシャスバイアスのように、人の心の中に存在するものを「なくしましょう」といってもわからない。今後、具体的に取組を進めていくうえで課題と感ずる。
- 言葉の表現については、綺麗に整っている反面、力強さや本気度が伝わりにくい。今の表現だと、若い世代が読んだときにわくわく感がないのではないかな。アンコンシャスバイアスでいうと、解消したその先を見越した言葉を盛り込んでほしい。
- 重点目標 1 の「共に活躍できる基盤づくり」という表現について、「活躍できる」よりも「活躍し合える」「支え合える」といった相互性のある言葉の方が、重点目標 2 番目の「支え合う社会」と合わせるのであれば「し合える」の方がいいかな、とも思った
- 会長が言う誇れる兵庫というのが、実際グランドデザインとして、委員の皆さんの思いがここに集まってきてるっていうのを感じたと同時に、今見ている資料を読むと、そこに至ってないと感じたので、もっと議論していきたい。
- 男女共同参画に関しては、国の施策と企業側の認識にズレがあり、企業指導の現場では理解が得られにくい状況がある。施策の多くが女性向けに見えるが、実際には男性も当事者であるという視点が重要であり、男性が自分事として捉えることで、受け止め方も変わってくるのではないかと考えるので、そのような観点を踏まえて取りまとめができればいいと思う。

【地域の課題、市民活動等への支援について】

- 全体的に骨子案は整理されており、分かりやすくなっている。ただし、中山間地域における男女共同参画には依然として課題が多く、特に女性の都市部への流出が顕著であり、若者の転出超過の背景には地域間の格差がある。兵庫県が若者や女性に選ばれる地域となるためには、中山間地域で女性が暮らしやすい環境を整備する必要がある。そういった意味で、（主な取組について）若者・Z世代支援ではなく、もっと女性への取組を重視すべきではないか。
- 女性支援団体や市民活動の育成について、現行の主な取組への記述では「市町への取り組み支援」にとどまっている。SDGs17番目の「パートナーシップ」の観点からも、女性支援団体などの担い手への支援に関することが読み取れるような形にしてほしい。
- 女性支援の現場では、相談員が孤立・疲弊、あるいは個人で奮闘しており、横のつながりが不足している状況がある。当事者支援だけでなく、それを支える相談員同士の交流や情報交換、人材育成の仕組みが必要であり、県として積極的に支援をしていただきたい。
- 男女共同参画推進員としての活動経験上、研修時には意欲的な参加者が多く盛り上がるが、研修後は個々に任せられ、継続的な支援がないまま何をしたらいいかわからない状態である。もう少し、研修後の支援が必要ではないか。男女共同参画推進員の活動予算も1期につき5万円と限られており、実質的な取り組みが困難な状況にある。
- 女性の都市部への流出に関しては、経済的な損得が大きな要因であると思う。女性は特に、その地域に行ったら、自分にどれだけ得があるかを考える。行政側からの情報提供や接点が乏しく、住民が自ら調べなければならない状況に課題があり、手続きにきた住民に対して、県や市の制度を紹介するような仕組みが必要ではないか。民間だけで頑張っているのは違うと思う。
- 県の男女共同参画の取組と市町の男女共同参画センターとの連携のあり方はどうなっているのか。もちろん、市町ごとの特性はあるが、県全体としての一体感はあるのか
- 資料2で、自治会長の女性比率に関する記述があるが、子育てや仕事に加えて自治会長の役割を担うのは現実的に困難である。一方で、防犯・防災の観点から女性の地域参加は重要であるため、従来の負担の大きい活動スタイルではなく、ITを活用した効率的な仕組みが必要である。芦屋市の事例から、県が地域ポータルサイトのプラットフォームを整備し、市町が運営を担うなどの形も検討をお願いしたい。

【意思決定過程への女性の参画について】

- 県の審議会への女性委員の参加について、現場で忙しい女性経営者が多く、推薦が難しい状況があるため、参加しやすい会議運営の工夫をし、幅広い層の女性が参加できる環境づくりが必要である。
- 民間企業における女性管理職の登用について、管理職が男女問わず「罰ゲーム」と捉えられる傾向があり、敬遠されている現状を問題視しており、登用率の向上以前に、管理職の役割や価値を再定義する必要がある。

【アンコンシャスバイアスについて】

- アンコンシャスバイアスは男女共同参画の根幹にかかわる部分なので、今回のプランに盛り込まれたことはとても大きい。一方で、アンコンシャスバイアスという言葉自体の認知度は、一般には低く、研修やカウンセリングの現場でも、より具体的な例やわかりやすい言葉に置き換えているため、具体的な例や考え方を丁寧に補足する必要がある。
- アンコンシャスバイアスは男性の生きづらさにも深く関係しており、「弱みを見せてはいけない」「相談するのは恥ずかしい」といった価値観が、男性の孤立や自殺率の高さにつながっていると考えるので、支援を受ける力＝「受援力」を高める施策が必要であり、男性が安心して助けを求められる環境づくりが求められる。
- 次期プランにアンコンシャスバイアスが盛り込まれたことは非常に重要であり、男女共同参画の推進には不可欠な視点である。一方で、この項目が重点目標2「共に支え合う社会の実現に向けた意識改革」の推進項目として位置付けられているが、家庭内の役割分担だけでなく、職場の評価や組織風土など、どの項目とも関係しているため、どこに置くのがいいのか、少し考えながら資料を見させていただいた。
- アンコンシャスバイアスという言葉について、我々の研修ではより広い概念である「認知バイアス」として扱っている。もう少し表現を変えてもいいと考える。
- アンコンシャスバイアスについて、日々の啓発が一番難しく、これをどうプランに記載していくのかを考える必要がある。
- アンコンシャスバイアスは完全に解消されるものではなく、存在に気づきながら向き合うことが重要である。管理職になりたがらない若者の増加や、起業意欲の低下などの現状も踏まえ、働き方改革を進める一方で、こうしたところにも取組が必要ではないかと思う。

【アウトプットイメージについて】

- プランとして整った形でまとめることは重要だが、それとは別に、家庭・地域・職場などでの状況をストーリー形式にした教材のようなものがあると、教育現場や職場で議論のきっかけになるのではないかと。大変かもしれないが、小中高・大学・職場など、幅広い層に活用できる内容で、ビジョンを「見える形」で提示できれば面白いかなと思う。
- プランの内容は、提示する相手によって書き方が変わってくると思う。県のホームページに掲載された場合、男女共同参画に関心を持っている人は調べて閲覧する可能性はあるが、女性が自治会長になることに対して抵抗があるような固定的な意識を持つ地域の方は閲覧しない。そういう方には、紙で配布したとしても自分の意思を変えないことが多く、難しいと感じる。

【防災分野への女性参画】

- 防災現場における女性人材の不足について、希望者が少なく、危険や負担への不安が背景にある。女性が安心して参加できる支援の仕組みが必要である。
- 防災に関しては、女性の関心が低い現状があるが、実際には女性の視点が重要で、特に避難所のトイレの安全性やプライバシーの問題は大切であり、女性が安心して避難できる環境整備が必要である。防災は男性の得意分野とされがちだが、女性自身が知識を持ち、主体的に関わるのが重要であり、男女が協働して防災に取り組む姿勢を計画に反映させるべきである。
- 防災分野において、男女共同参画の視点が十分に浸透しておらず、防災と男女共同参画の関係性が理解されていないことが多い。プランの中で「～～と協力し合う」など具体的に

表現することが望ましい。人と防災未来センターや兵庫県広域防災センターなどと連携して、男女共同参画の視点を取り入れていったほうがいいのではないかと考えている。

【県庁の職場環境について】

- 兵庫県が「選ばれる地域」となるためには、県庁の職場環境の改善が不可欠である。昨年来、県庁内の人間関係や人事の公正性に関する問題が SNS 上で話題となっており、全国的にネガティブな印象がついているため、プランで、県内企業への県外からの志望者等へ安心感を訴えられないか。
- 県庁の職場環境の改善策として、①上司と部下の利益相反の回避を明文化すること、②昇任・昇格・配置の透明化、③職場の雰囲気や働きやすさに関する匿名アンケートの定期実施と通報窓口の整備、④倫理・コンプライアンスに関する外部レビューの実施と公表、などの取組を通じて、県として安心して働ける環境を発信し、通報窓口の処理日数等の KPI も設定すべきではないか。
- 女性副知事の登用を歴代知事に要望してきたが、実現していない現状に触れ、プランの中でそのような提案ができれば面白い。
- 県庁の職場環境を整えることが、県民の誇りや信頼につながるが、プランにそのまま記載するのは難しいので、うまく表現できないかと思っていいろいろと考えている

【その他】

- 県が男女共同参画にどれほどの優先順位を置いているのか、予算の規模や配分方針を教えてください。
- 計画の重点目標や推進項目を具体化する際には、抽象的な表現をどこまで具体的な指標や取り組みに落とし込むかが課題である。今回の審議会として、どの程度まで踏み込んで議論すべきなのか、どうソフトランディングさせないといけないのか。
→（事務局）今回の骨子案では、主な取組の表題だけ記載しているが、次回の審議会では数値目標も含め、また具体的に施策も落とし込んで、文章化して示す予定なので、そこを踏まえてご意見いただきたい。
- 文系・理系の区分についても、現代のビジネス環境では不自然であり、県が率先して文理融合型の大学設立などを提案できれば面白い。
- 子宮がん・乳がんの受診率が兵庫県で低いのはなぜなのか。原因が明確であれば対策が可能であるし、原因がわからなければ探さないといけない。
→（事務局）県民全員に理由を聞いているわけではないが、令和 4 年の県民モニターアンケート調査では、受診しない理由として「必要なときは、医療機関を受診するから」、「費用がかかるから」という回答が多かった。
- プランは主に就労女性が想定されている印象があるが、農業に従事する女性も同様に働く女性であり、企業を支える女性と同じ立場であるという内容になれば、共感できる部分も増える。
- 小さいころから、女性はおしとやかに、男性は逞しく、と育てられるものだが、実は反対の性格を持っていて、女性は強く逞しい。いろいろな言葉や表現があっていいと思うが、男性・女性ともに、自分で選択して生きていくことができる知識や能力が身に着けられるような環境を与えてあげることが大切である。

- 今は東京も海外も近いから、行ってもいいと思う。また、帰ってくればいい。自分の人生の中で、そのとき、そこで何がやりたいのか、それは認めてあげないといけない。

【総括】

- 男女共同参画やジェンダー平等は、単に女性の問題を扱うのではなく、背後にある男性の問題も含めて捉えるべきである。ストーカーの事例など、男性側の内面の問題が女性への暴力として表出することについて、どう議論したかという痕跡を残せるとしたら、文言の選び方やアウトプットの形を工夫することで、議論の成果をより効果的に伝えられると考えるので、今後も議論を深めていきたい。
- 次回は指標の問題にも踏み込み、市民を広く巻き込むために、誰に向けてどんな言葉で伝えるかを考える必要がある。当事者意識やわくわく感といった要素を、次回の議論やアウトプットに活かしていきたい。